
車輪の唄

逃げ水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車輪の唄

【Nコード】

N8430D

【作者名】

逃げ水

【あらすじ】

BUNPOFCHICKENの車輪の唄を小説にしてみました。

（前書き）

もしかした気に入らない人もいるかもしれませんが、読んでいただけたら幸いです。

今日朝早く、俺は大切な人の大切な用事を手伝うために自分の自転車に乗ってそいつの家に向かった。

「おはよ〜。」

そいつは大きな鞆を地面に置き、俺に手を振っている。

「おはよ、恵美。荷物はそんだけか。」

「そうだよ、最低限必要な物しか入れてないから。それより早く行こ、隼人。電車の時間に間に合わなくなるよ。」

そう言っただけで恵美は俺の自転車の後ろに跨がった。

今日の大事な用事とは、俺の彼女の恵美が遠くに引越すため駅まで俺が送迎する事になった。

ただ俺達の住む町は田舎のため、電車が1時に二本しか出ておらず乗り遅れると次までかなり時間が掛かる。

「よし！飛ばすからしつかりと掴まれよ。」

「飛ばすのはいいけど、安全運転でね。」

「任しとけ。」

そして俺は自転車をこぎだした。

俺の自転車は年季物だ。とくに車輪にいたっては錆び付いて、キーキーと悲鳴をあげながら俺達の体運んでいく。

駅までの道程、ペダルをこぐ俺の背中には寄り掛かる恵美の温もりが確かに感じられた。

それも今日で最後。

もう感じるられる事は無い。

商店街の近くまでこぎ着いた。

此処まで来れば駅は近い。

しかし明け方の為なのか、商店街はとても静かだった。

「やっぱり朝早いから人が誰もいないね」

「そうだな。」

恵美の言うとおり、人っ子一人いないらしい。

「世界中に二人だけみたいだな。」

俺は小さく言葉を零した。

「えっ、何か言った？」

「なんでもない。」

自分で言っというて恥ずかしくなってきた、照れ隠しの為、怒鳴ってしまった。

「何よ、怒鳴らなくてもいいじゃん。」

そお言っ恵美は、このこのと言いながら人差し指で俺のほっぺを突いてくる。

「やめろよ、危いだろ。」

永遠にこの幸せが続くと思った。
いや、今でも続くじゃないかと思う。
そんな事はないのに。

「さあ、気合い入れてこぎますか。」

駅に向かうための最大の難関の坂が俺達の前に現れた。
一人乗りですらきついというのに、今は二人乗りプラス大きな荷物付きだ。

はつきり言って、こぎながら登りきるのは不可能だ。
それでもやらなくてはならない。

「ほら、頑張れ。もうちょっと、あと少しだよ。」

この声がある限り俺はペダルを踏み続けることが出来る。
それどころか冗談だって言える。

「だ、やっぱり無理。ていうかお前重い。」

「ごすっ」

鈍い音が俺の頭からはっせられた。

恵美が本気で俺の頭をグーパーパンチしてきた。

「あ、危ないだろ！」

「うるさい、女の子に重いとか言う隼人が悪い。」

少しの沈黙、そして二人して笑いだす。

気付けばもうすぐ坂を登りきる所だった。登りきると二人は同時に言葉を無くした。

迎えてくれた朝焼けがあまりにも綺麗すぎたから。

きつと恵美は笑っているのだろう。

でも振り返ることは出来なかった。

俺は泣いていたから。

駅に着くと恵美は切符を買いに行く。

俺も入場券を買いに行くため券売機まで行く。

恵美は券売機の1番端の1番高い切符を買い、俺はその町をよく知らない。

その中でも1番安い入場券をすぐに使うのに大事しまった。

恵美が改札口を通ろうとしたら、大きな鞆を改札口に引っ掛けて通れないでいる。

そうすると恵美は俺の事を見てきた。

目を合わせないで頷いて頑なに引っ掛かる鞆の紐を俺は外してやった。

「ありがとう。」

笑って言うてくる。

でも俺は笑い返すことが出来なかった。

ホームの椅子に座り電車が来るのを待つ。

「隼人、別れる時は笑顔で送ってよ。泣いてる顔なんか見たくないからね。」

「ああ。」

中途半端な返事しか出来ない。
すると列車がやってきた。

「お別れだね。」

「・・・・・・・・。」

俺は返事が出来ない。

響くベルが最後を告げ、恵美だけのドアが開く。何万歩より距離のある一步を踏み出して恵美は言葉をかけてきた。

「約束だよ、必ずいつの日かまた会おうね！」

「・・・・・・・・。」

俺は応えられず俯いたまま手を振った。

間違いじゃないあの時恵美は、恵美は・・・・・・・・

俺は駅に停めていた自転車に乗りこぎ始めた。

線路沿いの下り坂を風よりも速く俺は自転車を飛ばしていく。
恵美に追い付けと。
錆び付いた車輪は悲鳴をあげ、精一杯並ぶけれどゆっくりと離されていく。

泣いていただろあの時、ドアの向こう側で。
顔を見なくってわかったよ。

声が震えていたから。

笑顔で別れよって言ってたくせに。

俺に気付いた恵美は窓ごしに驚いた顔して見てくる。

俺は離れていく恵美に、笑顔で言っちゃった。

「約束だぞ、必ずいつの日かまた会おう！」

恵美は俺の声が聞こえたのか、涙を流しながら笑顔で何度も頷いている。どんどん遠ざかっていく恵美に見えるように、俺は大き手を振った。

列車もすでに見えなくなる。商店街から人の賑やかな声が聞こえてくる。

「世界中で一人だけみたいだな。」

俺は小さく言葉を零した。

錆び付いた車輪は悲鳴をあげ残された俺を運んでいく。
背中に微かな温もりを無くしたまま。

「恵美、もういいよな。」

俺は頬を流れる涙を止めることがもう出来なかった。

く
終
わ
り
く

（後書き）

感想・評価・アドバイスをよければ下さい。
そうしていただければ、次はきつと気に入ってもらえるものが書けると思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8430d/>

車輪の唄

2010年12月12日08時40分発行